

細川ガラシア考

田中 裕

二つの異なる世界（カトリックの精神世界と武士道の世界）を共に生きた細川ガラシアの思想と生き様は、これまで多くの人々の関心の的となってきたが、「ガラシア」の名前が、イエズス会の宣教師達の書簡によってヨーロッパのカトリック世界でも知られており、彼女を主人公とした物語が語り継がれ、音楽劇として一六九八年、オーストリアのウィーンで、ハプスブルグ家の皇帝レオポルド一世とその家族の前で上演されたことは、余り知られていない。この劇では、ガラシアは、キリスト教的な美德の鏡であり、逆境にあっても不変の信仰を貫いた「丹後の国の勇敢なる王妃」として称賛されている。¹

ヨハン・ベルハルト・シユタウト作曲のこのオペラの

楽譜が、ウィーン国立図書館に所蔵されていることがわかったのはごく最近のことで、上智大学の故トーマス・インモース教授の助言を受けたウィーン在住の新山カリツキ登美子氏が発見、その原譜を沖縄音大教授の豊田喜代美氏が校訂し、上智大学創立百周年記念事業のひとつとして二〇一三年に紀尾井ホールで蘇演された。このオペラの脚本は、二六二七年にフランス人イエズス会士のフランソワ・ソリエがまとめた「日本教会史」がもととなっており、そのオランダ語版が一六六七年にオランダ人イエズス会士コルネリウス・アザルによってアントワープで刊行、さらにそのドイツ語版が一六七八年にウィーンで、「丹後の女王の私信とキリスト教的美德」というタイトルで出版されて

いる。「丹後の王妃ガラシア」の物語は一八三八年にフランスでも公刊されているので、十九世紀初め頃までは、ガラシア(Garzia)の名前は、フランス、オランダ、神聖ローマ帝国で語り継がれていた。

日本では江戸時代から明治初めまでは、細川忠興夫人が、「ガラシア」という洗礼名をもつキリスト教徒であったと云うことは知られていなかった。たとえば、寛文八年(一六六八年)に儒者の黒沢宏忠が出版した「本朝列女傳」の「細川忠興孺人(孺人＝身分高き人の夫人)」では、武士の妻の鏡として、貞女にして列女(忠義の心をもつ気丈な女性)として称賛されている。それによると、彼女は石田三成の使者に向かつて、「源君之命東関に在り。我其の夫人なり。如何に秀頼に従はんや。盛衰を以て節を改めず。存亡を以て心を易えざるが武士の家法なり。偶々武士の家に生まれ、豈家法を辱めんや」と述べて、武家の作法に則って自決したと書かれている。「戦いに勝利するか敗北するか、その盛衰によって節を曲げずに、生きるか死

ぬかの存亡の時にも心を変えないのが武家の法」というあたり、ここでは、忠興夫人は、「当代の節女にして、婦人でありながら義のなんたるかを知っていた」武家の妻の理想とも云うべき人物として称賛され、彼女を称える頌

「細川内室 當時節女 婦而有儀 克誦相聞^② 視死如帰 侍女尚侶 子葉繁枝 世有誉処」が添えられている。

なぜ日本の儒教の学者によって「不変の忠誠心をもってサムライの家の掟を辱めなかった、貞女の鏡」と称賛され、ヨーロッパのカトリックの信仰の世界では「キリスト教的美徳と不変の信仰を貫いた聖女」として物語られてきたのであろうか。

ガラシアの内面の世界を知る手がかりとして、彼女が當時の大阪の修院長セスペダスにあてた書翰、彼女の愛読していた信心書である『キリストに倣いて』、當時のアヴェ・マリアの祈りの文言を手引きとして考察したい。

イエズス会宣教師の書簡に見られるガラシアの人物像について

西欧に伝えられたガラシアに関する物語とそれを元に創作された楽劇「勇敢な婦人」に大きな影響を与えたものはイエズス会の宣教師達の書簡およびそれらを纏めた年報である。そのなかでも、一五八八年のルイス・フロイス書簡に引用されたガラシアからグレゴリオ・セスペデス大坂修院長宛の書翰は、書かれた時期が関ヶ原の合戦以前であること、すなわちガラシアの悲劇的な死の前に帰天したフロイスによって引用された書簡である点で、生前のガラシアの姿を如実に伝える同時代の歴史的資料として最も価値のあるものである。日本では、ガラシアと面識のある人物によって書き残された第一次資料として著名な「霜女覚書」でさえ、関ヶ原の合戦から四八年後の一六四八年に熊本藩主細川光尚（ガラシアの孫）の求めに応じて、ガラシアの侍女の一人であった霜女からの聞書きであった。したがって、後世の劇的な脚色や徳川幕府の厳しいキリシタン禁令

への政治的な配慮から自由な歴史的なガラシア像を伝える貴重な書簡であるといえよう。

武田昨朝当地に参り、伴天連様、いるまん様方の御動静を拝聞仕り喜びに堪へず候へども、とりわけ、皆様残らず日本を御退去なさるるものに非ざる由を承り御同慶に堪へず候。

これによりて、妾も心に力を得、何れは当地方にもお戻りなされ、御面接を賜はる事もあらんかと希望を新たに致し候。妾の事につきましては、伴天連様御存じの如く、吉利支丹と相成候儀は人に説得されての事にてはこれ無く、唯一全能の天主デウスの恩寵ガラシアにより、妾自らそれを見出しての事に罷在り候。たとへ、天が地に落ち、草木が枯れはて候とも、妾の天主に得たる信仰は決して変る事無かるべく候。最も悲しみに堪へざることは、伴天連様への迫害により妾どもの受けし不幸にて候。されどこれによりて、よき吉利支丹としての信仰があかさるべきものと存ぜられ候。伴天連様方御退去の後、

妾への苦難は絶えし事無之候へども、何事も天主の御助けにより御加護を受け居る次第に御座候。

二男(三歳の幼児)は一時重態を伝へられ、もはや恢復の見込無之候折、この幼児の魂の空しく失はれ候を憂ひ、如何にすべきかとマリアに相談仕り候処、最善の方法は御作者天主に一切を御委せするにしくはなしとて、極秘裡にマリアにより洗礼を授けヨハネと名づけ候。然るにまことに不思議にも、その日より快方に向ひ今日にては全く恢復仕り居り候。

戦争より御帰還後、越中殿には日常の御生活ことの外厳しく、妾の一子の乳母にて同じく洗礼を受けし者を、些々たる過失によりてその鼻をそぎ、両耳を切り取りて屋敷の外に逐ひ出し候。それに引続き他の二人の侍女の髪も削り、三人共吉利支丹なるが故に逐ひ出され候。妾は注意深く、侍女どもに必要な品々を整へ、信仰を失はざる様に激ましやり申し候。

数日前、越中殿丹後領に行かれ候も、御出発に先だ

ち、御帰還後は留守中屋敷内の様子を尋問致さるべき旨妾に申され候、これ天主の教に就いての事なるべく、又屋敷内にて吉利支丹となりし者に関する事ならんと懸念仕り居り候。

マリアと妾とはいかなる迫害が越中殿或は関白殿の何れより来り候とも既に覚悟を定め、その機に臨み天主への御大切の為めに、いくばくかの苦難を致し得る事を喜び居る次第に御座候、伴天連様方の御動静を御伺ひ致し度きものと日夜念じ居り、我等の天主が再び皆様方を当地に御連れ戻し下され、妾を助け、妾の幼児を御導き下さる様あくれ切望致し居り候。

機会にても有之候はゞ、皆様よりの御便り賜はる事御忘れ無き様、また御禱りと御弥撒に於いて、妾のためにお祈り下さる様重ねて奉懇願候。妾と共にまかり居り候信者は皆信仰固く、殉教に就きては若しも斯く重大なる意義ある時を見出し候はゞ、皆の者に相勧め申すべく候。⁴この書簡はキリシタン武田(サンチヨ)

が九州から大阪に帰ってガラシアに伴天連パードレや修道士イルマン達の消息を伝え、彼等が日本に留まる決心をしたことを喜び、いつか宣教師達に再会する希望が生まれたという言葉から始まっている。そして「伴天連パードレ（セスペデス）様もご存じのように、私がキリシタンになったのは、他人から説き勧められてのことではなく、まったく唯一全能の天主デウスの恩寵ガラシヤにより私自身が見出したものである」と述べた後で、「たとえ天が地に落ち草木が枯れ果てたとしても、私の信仰フィデスは変わることは決してない」と力強く自らの信仰を告白している。

伴天連追放という秀吉のキリスト教に対する突然の態度変更は、当時のキリシタン達にとつてまことに大きな不幸であったが、この逆境においても恩寵が与えられ良きキリシタンとしての信仰を証しことができると述べて、彼女自身の身辺に起こった出来事を報告している。

ひとつは幼き二男（興秋）が病にかかり危篤状態になったので、極秘裏に（侍女の清原）マリアの手から洗礼を

授けたところ、奇跡的に快癒したことである。これは彼女が逆境の中で見出した恩寵の光の如きものであった。しかしながら、細川家の当主忠興のキリシタン詮議は厳しく、家中のキリシタンの侍女達に残酷な体罰を加えたうえで追放した。ガラシアはこの不幸な侍女達に密かに生活に必要な一切のものを送り、彼女たちがキリシタンの信仰を守るように励ましている。

この書簡は、越中殿（忠興）が丹後の所領にでかけるときに、帰阪するときには厳しいキリシタン詮議をすると言いついたことがのべられており、大阪の細川屋敷に閉じ込められながらも、マリアとともにキリスト教信仰を守ろうとするガラシアの心中が率直に吐露されている。そこでは、「清原）マリアと私（ガラシア）はいかなる迫害に対しても―それが越中殿（忠興）からであろうと関白（秀吉）からであろうと―それに耐える覚悟をしている」こと、「天主への御大切（愛）のゆえに何事か苦しむことが出来たらば嬉しい」と迫害による苦難を受容する用意ができてい

るので、伴天連様方の消息を聞かせてほしいこと、天主が伴天連様方を当地（大阪）に連れ戻し、私（ガラシア）の子ども達を導いてくださるように日夜祈っているのです、どうか伴天連様も私（ガラシア）にお便りを賜る機会をお見逃しなきよう、またと御弥撒の折りに私のことも覚えておいてくださいと、司祭と共にあるべき信徒の心情を吐露している。この書簡の結びの部分では、ガラシアのまわりにいる（潜伏した）キリシタン達の信仰は堅固であり、ということについても、もしそのような重大な意義のあることが（天主の御心によって）見出されたならば、それを受け入れる勇気をもつように互いに励まし合っている、と述べている。

ガラシア自身が伴天連セスペデスに書いた書簡が、彼女の信仰のあり方を知る上で最も重要な資料であるが、それに次いで、ほぼ同じ頃に宣教師たちがガラシアについて言及した書簡群も参考になる。

まず一九三八年にローマで発見された南イタリア生ま

れの宣教師アントニオ・プレスティノが平戸で一五八七年に書いた書簡がある、そこは、「丹後国の越中殿（細川忠興）の奥方の改宗」が、秀吉による伴天連追放令という艱難の時代に「最も勇気と慰めを与えた」女性としてガラシアに関する詳しい記述がある。プレスティノ書簡では、史的ガラシアの解明に資するつぎのような記述がある。

（一）「信長を討った有名な大将」の娘である「奥方」が、もともと靈魂の不滅を否定する日本の宗派（禪宗）に属していたが、夫の越中殿（細川忠興）を通じて、（千利休の兄弟弟子として夫と親交の深かった右近殿（高山右近）のキリシタン信仰について聞き及び、キリスト教に強い関心を抱いた。

（二）「奥方」は「非常な理解力と聡明さ」をそなえていた女性であったので、当時大阪にあったキリシタンの聖堂にでかけて直接にその教えを聞くことによって、問題をもっと根本的に知りたいという切望を抱いた。

（三）忠興の留守中に「奥方」は厳重な警護をうけてい

て、自由に外出することは許されなかったもので、関白に従って薩摩攻略のためにでかけた夫の留守中に、夫人は屋敷の警護をいかくぐって、数名の侍女と共に大阪の聖堂を訪問した。彼女はその名前と身分を明かさずに、日本人の伝道士（コスメ）に逢い、長時間にわたつての教示を聴き、以前から不審であつた事柄について質問したあとで、その教に満足して受洗をもとめた。しかし、修院長のグレゴリオ・セスペデスは、彼女が関白の側室の一人かも知れないと思ひ、その場で洗礼を授けることを躊躇した。彼女の身元を従者に調べさせて、細川忠興の正室であることを知つた後、宣教師達と「奥方」との交流が継続することになった。

(四)「奥方」は洗礼志願者として「宣教師達と文通する方法を見出し、信仰の問題と自己の義務に関して議論を続けながら、侍女をはじめとして、」次々と家中のものを聖堂に使わして、順次に説教を聞かせたので、最初はその教えに反発していた侍女達も、次第にキリスト教の教えに引きつけられて、「救世の真理」を知つてからは内

的な満足を感じて、奥方よりも先に洗礼を受けることが出来た。「奥方」は一人の洗礼志願者であつたにもかかわらず、すでに受洗した侍女たちの教師としての役割も果たしていた。彼女はまた、侍女達だけでなく、同家に仕えるその夫達にも改宗を勧めて、何人かの改宗者とキリスト教の理解者を得た。プレステイノ書簡で注目すべき事実は、「奥方」が既に改宗していた侍女達に向かつてヨハネス・ジェルソンの本の講読を行った。この本は、大阪の宣教師達と日本人の修道士イェルマンの協力のもとですでに日本語に訳されていたもので、クリシタン時代に「こんでむつすむん地 *contemptus Mundi*」というタイトルで一六一〇年に和訳が出版されたものであるが、トマス・ア・ケンピス著の「キリストにならいて *Imitatio Christi*」という書として現在知られるものと同一の内容の著作である。プレステイノ書簡は一五八七年の日付であるから、すでにこの時点で和訳（すくなくとも原本の抄訳）の為されていたことが窺える。

プレステイノ書簡よりもさらに詳しくガラシアのキリ

スト教入信の経緯を記録したものは、ルイス・フロイスの同じ頃に書かれたいくつかの書簡⁵⁵、宣教師達の記録を纏めたイエズス会の「日本年報」の記事、そしてフロイスの浩瀚な著書『日本史』の中のガラシアに関する記録がある。

ルイス・フロイスは「丹後の領主の奥方」という言い方だけではなく、ガラシアという洗礼名を使って彼女について語っているが、一五九六年一月一三日に長崎で記した書簡では、キリシタンとなった武士やその妻が、家の名誉のために自害する事が許されるかどうかと言う問題に触れていることが注目される。太閤秀吉が自分に対して陰謀を企てたという口実でその甥である関白（秀次）を討つことを命じたとき、多くの他の諸大名と共に関白と親交のあった忠興の政治的な生命もまた危殆に瀕した。フロイスは「身分の高いものは自害する前に、まずその夫人、子ども、侍女たちをも殺して敵の手中に陥らないようにすることが日本人古来の習慣である」と説明した後で、この時点でガラシアがすでに「身に危険が迫った場合に直ちに自害しな

ければならないと夫の忠興に命じられたが、それに対してキリシタンとしてどのように対応すべきかという質問を宣教師にしたことを記録している。パアレは、自害は決して許されない、それこそ天主にたいする最も重大な罪であり、すべての人を生命の危険から救うことが天主の慈悲にかなうことであるといったところ、ガラシアはパードレの勧告に従うと答えたと記録されている。

江戸時代以後支配的となった儒教倫理の影響の元で、武家の妻の亀鑑として賞賛された「細川忠興の内室」の物語の様相なバリエーションのなかには、しばしばガラシア自身が、子ども達を敵方に人質として渡さぬ為に殺害したのちに、武家の作法に従って自害しようとしたとき悲劇的な物語が散見される。これはガラシアのキリスト教信仰について何も知らぬ作者と聴衆の思い込みであったことは、日本側に遺された並行資料である「霜女覚書」や細川家の家記にそのことが記されていないことから明らかである。しかし、我が子を何かのために犠牲にする他殺はもち

ろん、自殺をも大罪として否定するキリスト教倫理と、名誉ある自死をみとめる武家の倫理との間にある矛盾相克を、ガラシアおよび彼女から相談を受けた宣教師達がどのように対応しなければならなかったかと言うことは、さらにたちいった考察を要する事柄である。

二六聖人の殉教を目撃し、その記録を残して日本で帰天したルイス・フロイスは、ガラシアの壮絶な最期も関ヶ原の合戦も知らずに『日本史』を書き残したが、その後の日本の歴史については、他の宣教師の書簡や、日本年報の記事、そして日本語に最も通じていた通辞ロドリゲスの「教会史」は侘教寄（茶湯）を通じて日本文化への適応政策をとったヴァリリヤーノの布教政策を体现したものであて、とりわけ高山右近についての貴重な記録を残している。

また時代はずっと下るが、レオン・バジェスは、西欧に残る古文書を編纂整理したうえで、内府様（家康）の統治以後の日本の『キリシタン宗門史』を出版したが、そこにも簡潔ではあるが要領を得たガラシアに関する記述が

ある。「総ての道徳の完全な鏡であった」ガラシア夫人の死について、バジェスは「彼女は、前から如何なる事変に遭おうともそれに対する覚悟が出来ており、また神の思召しに従って死ぬことを一種の贖罪として進んで受け入れた」と書いている。バジェスが「贖罪」という場合、誰の如何なる罪をどのようにして贖うということが意味されているのか、それ以上詳しくは書かれてはいないが、自分が夫の忠興と細川家の名誉のために死ぬという運命を、天主の与えたもう摂理として受容した彼女のキリスト者としての心を理解する上で重要な、そして日本の歴史家が往々にして見落としがちなキリスト教的な視点を思い起こさせてくれるものであろう。ガラシアの悲劇的な最期について、同時代の報告書として重要な一次資料は、Valentin Carvalho S.J. が編輯した一六〇〇年一〇月二五日付の日本年報 (British Museum, Additional manuscripts 5 859, ff. 138-140)。この記事を収録した Gurreiro の冊子 (一六〇三年) が上智大学のキリシタン文庫に保存されている。ルイス・

フロイスの知り得なかったガラシアの最期が、ヨーロッパの読者に向けた補足説明と共に、目撃者の情報を元に記したものである。

〔細川忠興は〕諸將と共に内府様〔家康〕に従って關東の戦に赴いたのであるが、彼は家老小笠原殿以下家臣の者の監督に任せて、奥方と家族の者を〔大阪に〕残していった。越中殿は常にそうであるように、万事を名誉のために心がけていたから、家を離れるときには、いつも警備として残してある家老及び家臣に命じ、もし留守中に何か奥方の名誉に関する危険が勃発したらば、日本の習慣に従って、まず奥方を殺し全部の者が切腹して死を共にすべきであるとしてあった。このときにも同様のことを家来の者どもに命じたのであった。

さて、そのあいだに奉行〔石田三成〕は越中殿の邸に使いをやって、留守の者に対して、本日より戦争が始められたから、殿の奥方ガラシア夫人を殿の将来の

恭順の人質として引き渡すべしと命じてきた。これに對して家老等は奥方は絶対に渡せないと返答した。そこで奉行が手早く邸を包圍して奥方を捕らえようとしていることを知ると、一同は奥方の名誉のために、殿の命令を実行しようと決心した。そして事態の急をいちはやくガラシア夫人に知らせ、殿から命じられていることをそのまま申し上げた。奥方はさっそく、何時もきちんと綺麗に飾られている礼拝所に行き蠟燭を点させ、跪いて死の準備の祈りを捧げた。ようやく、奥方は礼拝所からたいそう元氣に出てきて、腰元どもを全部呼び集め、自分は殿の命令であるからここで死ぬが、皆の者はここを退去するようにと言い渡した。一同はそこを去るにしのびず、むしろ奥方と共に死出のお供をしたい希望を述べた。日本ではこういう場合、主人と死を共にするのが臣下の名誉であり、また習慣であったからである。ガラシア夫人は真に召使いたちから慕われていたので、召使たちが死の供をしたい

と望んだのであったが、奥方は無理に命じて邸の外に逃げさせた。その間に家老小笠原殿は家来共といっしょに全部の室に火薬をまき散らした。侍女達が邸を出てから、ガラシア夫人は跪いて幾度もイエズスとマリアの御名を繰り返しとなえながら、手ずから（髪をかきあげ）頸をあらわにした。その時、一刀のもとに首は切り落とされた。家来達は遺骸に絹の着物を掛け、その上に更に多くの火薬をまきちらし、奥方と同じ室で死んだと思われる無礼のないように、本館のほうに去った。そこで全員切腹したが、それと時を同じくして火薬には火がつけられ（大爆音と供に）これらの人々と共にさしもの豪華な邸も灰燼に帰したのである。ガラシア夫人の命令によって邸の外に逃された侍女たちの外は、誰一人として逃れようとしたものはいなかった。これらの女達は泣きながら、伴天連バードレオルガンチーノのもとにいつて、この事件の一切を知らせた。その報知を得て、我々は非常に悲しみ、かくも人の鏡と

して、とくに改宗してからはまれにみる徳の高い高貴な夫人を失つたことを非常に悲しんだ^⑤」

この報告のなかにある「越中殿は常にそうであるように、万事を名誉のために心がけていたから、家を離れるときには、いつも警備として残してある家老及び家臣に命じ、もし留守中に何か奥方の名誉に関する危険が勃発したらば、日本の習慣に従って、まず奥方を殺し全部の者が切腹して死を共にすべきであるとしてあつた」に続く記述は重要である。それは主人の忠興の命に従って自決することが、名誉を重んじる當時の武家の妻と家臣の「法」であつたということを當時の宣教師達が、的確に理解していたことを示している。また、侍女達が殉死を願ひ出たときに、ガラシアがそれを決して認めず、邸の外に逃げさせたという記事が重要で、彼女が侍女達の殉死を決して許さなかつたこと、自決するのはガラシア一人にとどめ、侍女は生き延びることを願うガラシアの心

をよく示している。結果として、伴天連^{パイドレ}オルガンチーノのもとに逃れた侍女達は、ガラシアの最期の有様を後世に伝える証言者の役割を果たすことになったのである。

ところで、ガラシアは死を前にして邸内の礼拝堂に入り「イエズスとマリアの御名を称えた」とあるように、この頃、忠興はガラシアのキリスト教信仰を許していたことが確認できる。同時代の宣教師達によって書かれた他の資料でも確認できることであるが、巡察師のバリニャーノがインド国王の名代という役割で秀吉と面会し、またバリニャーノの企画した遣欧少年使節が帰国して秀吉との面会を許されたことに表されているように、キリシタンが隠れた場所^所で祈禱を続け、信仰を持ち続けることが事実上認められていたという歴史的背景を考慮すべきであろう。ガラシアの時代は聖書全体の翻訳はいまだ為されていないが、そのかわりに「こんてむつすむん地」や「スピリチュアル修行」（イエズス会の「霊操」）のような信心書によってキリストに倣う修道の道が示されていた。肉体の死を前にし

たガラシアの祈りを理解するためには、当時の「アヴェ・マリア」の祈りの言葉と、「キリストにならない」のどのような言葉にガラシアが支えられていたかを見る必要があるだろう。

細川ガラシアの読んだ「キリストに倣いて」と「アヴェ・マリア」の祈り

プロテスタントとカトリックの区別を越えて聖書に次いでキリスト教徒によってよく読まれた本は「キリストに倣いて」(imitatio Christi)である。この書の日本語訳は、『コンテムツス・ムンヂ (contemptus mundi)』と題して一五九六年にローマ字で天草から、一六一〇年に国字で京都から出版された(後者は前者の抜粋改訂版)。ともにキリシタン文学の白眉と称せられるほどの優れた翻訳である。前に述べたように、細川ガラシアが、国字で書かれた「キリストに倣いて」を座右の書としていたことが宣教師

の書翰によって知られる。たとえば、受洗する前の頃、「細川忠興の奥方」について、ルイス・フロイスは次のようなエピソードを伝えている。

「奥方（細川忠興夫人）は司祭達に、デウスの教えについて関心をいっそう深めていきたいので、御身等の手元にある日本語に訳され、日本の言葉で書かれていける靈的な書物を是非とも送っていただきたいと願った。司祭達が当初、『Contemptus Mundi』を贈ったところ、彼女はそれがいたく気に入り、片時もその書を手から放そうとせず、我らヨーロッパの言語に出てくる言葉とか未知の格言について生じる疑問をすべて明瞭に書き留め、侍女のマリア〔儒者清原枝賢の娘で已に洗礼を受けていた〕にそれをもたせて教会に使わし、それらに対する回答を自分の所にもって帰らせた。奥方の文字は日本できわめて稀なほど達筆であり、彼女はそのことできわめて名高かったから、彼女は後に自筆でもって他の靈的な書物の多くを日本語に書き写し

た」

ルイス・フロイスは、通辞ロドリゲスと並んでもっとも日本語に通じ、日本文化についての深い理解を持つ宣教師であった。フロイスは、細川ガラシアが「日本で極めてまれなほど達筆であり、彼女はそのことで極めて名高かった」と書いているが、現在、細川家の永青文庫に保管されているガラシア自筆の書簡はそれを裏書きしている。また、宣教師と文通するために自らローマ字を覚え、かつポルトガル語やラテン語のようなキリスト教を理解するために必要な外国語も学んでいた。また、その辞世の歌から知られるように、歌字や茶湯に代表される日本文化の教養を身につけていた女性であった。いふなれば、ガラシアとその周辺にいたイエズス会宣教師、日本人の修道士イルマンのあいだには、東西の文化の交渉があり、キリスト教の修道書の翻訳という共同作業の中で、現代風に言えば、キリスト教の文化内開花にむかう第一歩が記されていたと言って良いであろう。

さて、ガラシアが忠興の命に従い大阪城近くの細川屋敷に留まる道を選択したか、その決断を理解するために、『Contemptus Mundi』のローマ字完訳本第二卷二二章（国字本の第二卷第九章）のつぎの言葉に注目したい。

「尊き御クルス〔十字架〕の御幸の道〔王道〕のこと——天の御國に至る道となるクルス〔十字架〕を請け取り奉る〔自分の責任として引き受ける〕ことを何とて恐るるぞ。クルスに息災〔救い〕と寿命〔生命〕があり、敵を防ぐご擁護〔庇護〕もクルスにあり。天の甘味〔至福〕クルスにあり。アニマ〔心〕の強勢勇氣〔堅忍不拔の心〕もクルスにあり。歡喜悦予もクルスにあり。善徳の極めもクルスにあり、外になし。かるが故にクルスを担げてゼズ・キリシト〔イエズス・キリスト〕を慕ひ奉れ。不退の命〔永生〕に至るべし。キリシト先ず一番に先立ち給ひて御身のクルスを担げ給ひ、汝の為にクルスにて死し給ふなり。これ汝にもクルスを担げさせ、それにて死せんことを望ませ給ふべき為な

り。その故は、キリシトともに死するに於いてはともに生きながらゆべし。辛苦の御友となり奉らば、天の快樂の御友たるべし。」

「キリストに倣つて、十字架の道行きをすること、キリストが先に、あなたのための十字架を担われ、あなたのために死なれたのだから、そのキリストを慕いて、キリストとともに十字架の道を歩み、キリストと共に死し、キリストに於いてキリストと共に生きること、辛苦の御友は天においてかならず快樂（至福）の御友となる」という、「キリストに倣いて」からイグナチウス・ロヨラの「スピリツアル修行（靈操）」に受け継がれたキリスト教の根本テーマが、上の文に簡潔に要約されている。

細川ガラシアが、「死が不可避であった状況にもかかわらず、細川邸から逃げ出して、命を永らえる道を選択せず、自分の命運を自ら引き受けた理由」を考える場合、今引用した箇所後に続く次の文が非常に重要な関わりを持っているので、次にそれを引用する。

「一つのクルスを捨つるに於いては、また別のクルスに遭ふべきこと疑いなし。もしくは猶勝りて重きクルスもあるべし。人として一人も遁れざるクルスを汝一人逃れんとするや。善人たちのうちに何れか難儀クルスを遁れ給ひしぞ。我らが御主ゼズ・キリシトも御在世の間、実に一時片時もゴッパシオン（受難）のご苦痛を通れ給ふことなかりしなり。その故は、キリシト苦しみを凌ぎ給ふを以て、蘇り給ひ御身のゴロウリヤ〔栄光〕に入り給ひしこと肝要なり。しからば、汝何とて尊きクルスの道より外を尋ぬるぞ？ゼズ・キリシトのご在世中は、クルスとご苦患のみにてありしに、汝は寛ぎと歡喜を尋ぬるや？」

秀吉が宣教師の国外追放令を布告しただけでなく、日本人の信徒を含む二六名（そのなかには一二歳の少年もいた）を残酷な形で人々の前にさらし者にして行進させ処刑した頃、細川忠興は自分の家に害が及ぶことを恐れ、ガラシアに棄教を迫っていた。そのとき、ガラシアは本氣

で細川忠興と離縁して、信者の侍女に残酷な虐待をした忠興と分かれるために細川邸を脱出することを考えていたことが、宣教師との書翰のやりとりから窺える。しかしながら、ガラシアが細川邸を忠興に無断で脱出したと分かれば、忠興はかならずその手引きをした宣教師達を恨み、彼をキリシタン迫害の急先鋒にする危険があった。宣教師達はそのことをガラシアに告げて、なんとか彼女の細川邸脱出を思いとどまらせようとした。離婚の意思の固かったガラシアに対して、細川邸に止まって、その場所で自分の十字架を担う決断を促した言葉が、まさに上で引用した「一つのクルスを捨つるに於いては、また別のクルスに遭ふべきこと疑いなし」という「キリストに倣いて」の一節であった。

ガラシア一人が逃亡して身の安全を確保し、安穩な暮らしをむさぼることは、ガラシアのために先に十字架の上で死なれたキリストのご恩を裏切ることになるし、その結果は、夫の忠興を（ガラシアの父を殺し、二六人の無辜のキリスト信徒を十字架に架けた）秀吉側にますます接近させ、

多くのキリシタンたちを迫害する先兵にしてしまおうという危険に気づいたのである。ガラシアから相談を受けたオルガンチーノは「天主がお働き下されて、ついに天主への愛のために、彼女の担う十字架を抱くように決心させたのである」と書いている。(一五八九年二月二四日の書翰)

死の直前に、ガラシアは礼拝室でアヴェ・マリアとイエスの御名を称えて祈りを捧げたと記録にあるが、彼女の称えたと思われるアヴェ・マリアはどういうものであったか、當時の教理入門書、ドチリナ・キリシタンは次のように、まさに「ガラシア(めでたし)」という言葉から始まる。

「ガラシアみちみち玉ふマリアに御礼をなし奉る。御主は御身と共にまします。女人の中にいてベニジータ〔祝福された女性〕にてわたらせ玉ふ。又、御胎内の御実にしてましますゼズス〔イエズス〕はベネジイト〔祝福された男性〕にてまします。デウスの御母サント・マリア、今も我らが最期にも、我ら悪人のために頼み給へ。アメン」

避けられぬ死を前にして、ガラシアは平常心を保ちつつ、常に明るい顔で落ち着いていたと宣教師の記録にある。この悦びに満ちた平静さはどこからくるのか。「キリストに倣う」道は「マリア讃歌」と一つになっていますが、アヴェ・マリアの祈りが、まさに「ガラシア」という祝福で始まり、「御胎内の御実であるイエス」と「天主の御母マリアへの祝福」であることに注意したい。ガラシアは忠興とのあいだにたくさんの子供をもうけ、その子供のなかには忠興の了解を得て洗礼を受けた者も含まれていたから、彼女は細川家の妻としての務めを果たしつつ、忠興のキリスト教に対する偏見を改めさせたことが分かる。

忠興自身が改宗することは遂になかったが、アヴェ・マリアを称えることは、キリストの十字架を自分も担う事であると同時に、天主の御母マリアの祝福が、自分と息子達の上に(そして夫忠興のうえにも)与えられることを頼むオラシヨでもあったと思われる。

音楽劇 Muller Fortis で描かれた細川ガラシア
について

音楽劇 Muller Fortis の脚本は、イエズス会士コリネリウス・ハザードの教会史（一六七八年）の「丹後の王妃の改宗とそのキリスト教的美德」の記述をもとにしているとはいえ、史実を反映したものではない。例えばガラシアの殉教の日付を一五九〇年八月とし（実際は一六〇〇年八月）となっており、関ヶ原の合戦以前にガラシアは、（自決ではなく）迫害による身体の衰弱でなくなり、その死によって越中殿が改心して、キリスト教の擁護者となったところで終わっている。

しかし、史実ではないにしても、殉教を主題とする創作としてみる限り、十七世紀の西欧のカトリック諸国の人たちのキリスト教的世界観がよく分かるという点で、Muller Fortis という作品はなかなか興味深いものである。

ギリシヤ悲劇ではコロス（歌舞団）の役割が大切であるが、それを撰取したキリスト教的受難劇では、コロスは、

上演されるドラマの「想定された観客」の心を表現する役割を演じる。つまり、人格化された「不変 Constantia」「忿怒 Furor」「残虐 Crudelitas」「不安 Inquietas」「後悔 poenitentia」の演ずる幕間のアレゴリーは、いずれもドラマを見ている観客の心の世界の葛藤を表現するものであり、このコロスによって遠く離れた国のキリスト者の殉教劇が、時代的地域的な制約を越える普遍性を獲得することがめざされている。

人格化された人間の情念を表すコロスだけでなく、そもそもこの劇の登場人物は「ガラシア」（恩寵を人格化した人物でもある）、夫の「ヤクンドヌス（越中殿）」を除いて、原則として固有名詞では呼ばれず、王、王妃、王子1、王子2、娘1、娘2、キリスト者（高山右近がモデルか）、僧侶、などのように普通名詞で表現されている。こうすることによって、観客でもあったハプスブルグ家の王も王妃も王女達も、そこで上演されているドラマが、遠い異国の物語ではなく、自分たち自身の事柄でもあるというように、

感情移入することができたであろう。要するに、この脚本は、遠く東の果の国に伝道されたキリスト教の殉教者の物語を、西のカトリック諸国のクリスチャンにも理解できるような形で上演することをめざして書かれていると云うこと、「普遍にして不変の信仰」を「はるか東方の国の王妃の殉教」という特殊な事件を素材にして劇化したということである。したがって、この楽劇の観客は、みな「丹後の王妃ガラシア」が、「殉教の死」を迎えたことを理解したと思われる。

Mulier Fortis の中で、印象的な場面と台詞をいくつか挙げておこう。

まず、第一幕第二場、祭壇の前で祈るガラシアと息子達の場面に注目したい。突如大いなる地震がおきて、祭壇に安置されていた十字架が落下する。周章狼狽する息子達の前で、その落下した十字架を祭壇にもどしつつガラシアは次のように云う。

「それがどのような予兆であれ、キリスト者に相応し

い高貴な心で耐えることができますように (quidquid rei portendat, illud mente generosa feram, ut christianam condecet)]

福音書の伝えるイエスの十字架上の死の場面をふまえて、「キリストに倣う」ガラシアが殉教の死を受け入れることが、ここで暗示されている。優れたドラマトロギといえよう。

次に第一幕第五場、凱旋帰還する王による嵐のようなキリスト教迫害は避けられないことが分かったとき、逃亡を勧める家臣に対してガラシアの語る次の言葉は、この楽劇の根本主題に関わる重要なものである。

「王妃…その（迫害の）嵐の原因は何ですか？」「家臣…新しい信仰です」

「王妃…ああ何と祝福された罪でしょう…神の故に私が罪あるものとされるなら、苦境から逃れて自分分の幸せだけを求めることは間違っています。ガラシ

ア（恩寵）は、勇敢に、この場所に、しっかりと立たなければいけません。たとえ、地獄の門が開き、忿怒の群が私を襲おうとも、私の心は、神が見捨てたまわぬがゆえに、平安に満たされています。

（O culpa felix! Pro deo si sim rea, Non bene salutem consulam auxilio fugae. Hic esto fortis, Grata, hic standum tibi! Tota solutes orcus, Eumenidum manu, In me recumbat; corde non tollet deum.）」

正確な史実を知らなかった *Mulier Fortis* の作者であったが、上の台詞には、ガラシアと同時代を生きた宣教師達の書翰の内容が反映されており、「ガラシアがなぜ逃亡せずに死を受け入れたか？」その理由を、よく捉えていると思う。

バロック・オペラ *Mulier Fortis*（勇敢なる婦人）のタイトルの由来について

このバロック・オペラの表題の典故は、妻の理想について書かれた旧約聖書の箴言 31:10-11 のラテン語訳

Mulierem fortem quis inveniet? procul et de ultimis finibus pretium ejus. (LV)

勇敢な婦人を見いだすのは誰か？彼女の価値は遙か遠方より来るもの（真珠）よりも貴い

に基づくものである。

現行の旧約聖書の日本語訳や注解書では、この箇所がカトリック典礼の聖務日課で引用されていることを指摘しているものが稀であることは誠に残念である。僅かに講談社版「聖書」（バルバロ神父訳）だけが、「彼女は真珠よりも遙かに値打ちがある」という邦訳の脚注（1085頁）でカトリック典礼との関連を指摘している。「新共同訳」や「フランシスコ会訳」にもそういう注釈がなく、まして、プロテスタント系の聖書翻訳や注解書では、カトリックの伝承への配慮は少ないので、使徒継承のカトリックの聖伝のなかで旧約聖書詩編や賛歌がどのように引用され解釈されていたかという説明にであうことは稀である。

Keil-Dehitch の *Commentary on the Old Testament* の第六卷

(三二六頁)によると、箴言の該当箇所(七〇人ギリシャ語訳に由来する)解釈の伝承では、ここは箴言全体の「結び」という大切な意味を持っている点が、ユダヤ教徒が聖典としたテキストとは異なるということを指摘している。Keil-Delitzch によると、¹⁾は、

A virtuous woman, who findeth heri
She stands far above pearls in worth.

と訳するのが妥当であり、「mulier fortis」を、単に「勇気ある婦人」「気丈な婦人」という意味ではなく、「宗教的な美德をもつ婦人」という意味に取るのが適切であるとのとである。つまり真珠のような、どれほど高価であっても、金で買えるような商品とは全く異なる宝物、真珠よりも遙かに貴重な心を持つ女性―まことの信仰を持った女性―こそ妻とするに相応しいという意味に解釈しなければならぬ。

カトリック教会の旧約聖書の解釈は、七〇人ギリシャ語訳の大きな影響を受けているので、このような内面化され

た「理想の妻」のイメージが、箴言を「賛歌」として典礼文に撰取する際に影響したと云うことは十分に考えられる。

そこで、世俗的な意味で「理想の妻」がいかなるものであるかを述べているという印象の強い箴言のもともとのヘブライ語テキストを、カトリック教会がどのように内面化して、それをキリスト教的美德の一つとしての「勇気」をもつ女性として頌え、その「賛歌」を朗唱するようになったかを見るために、典礼の中で朗唱された *Mulier Fortis* のイメージに立ち返ってみよう。

Mulierem fortem quis inveniet? Procul et de ultimis finibus prætium eius. Confidit in ea cor viri sui, et spóliis non indigebit.

勇敢な貴婦人を誰が発見するであろうか? その価値は、(遠方より来る)真珠よりも遙かに貴い。夫は彼女を頼みとし、その事業に窮することがない。」

この旧約聖書箴言三二章一〇―一節の引用文の後で、次のような賛歌がカトリックの典礼聖歌として朗唱され

る。それは、まさに、キリスト教的美德をもってその信仰の証をした女性（殉教者）をたたえ、その女性のとりなしのいのりを神に祈る詩となっている。

〔勇敢な婦人〕のカトリック教会の典礼賛歌）

「我らすべてが声を挙げて勇敢なる貴婦人を頌えましょう。」

聖なる栄光とともにその御名をほめ歌いましょう。

彼女は純一なる天上の輝きに満たされ星空の光に輝いています。

彼女は下界の事物への愛を拒否し、この地上に留まることを気遣いませんでした。

諸々の天に向かって苦難の道を行き

その身体をしつかりと従わせ、

その靈魂を祈りの甘美なる糧で満たしました。

彼方の世界で、この世の喜びを捨てた彼女は至福を味わうでしょう。

王なるキリストよ、全てのものを勇敢ならしめる御方

よ、我らの至聖なる行いはあなたのものです。

高きところに居る彼女のとりなしの祈りによって、あなたの民の叫びを憐れみをもって聞き入れてください。」

バロック・オペラ *Mulier Fortis* がウイーンで上演されたときは、高山右近とやらんで、キリスト教的美德と信仰を証した人として、細川ガラシャを主人公とするオペラ *Mulier Fortis* が上演されたことが、これでわかるであろう。

賛歌原文のラテン語は以下の通りである。

Fortem virili pectore / Laudemus omnes feminam,

Quæ sanctitatis gloria / Ubique fulget inclita.

Hæc sancto amore saucia, / Dum mundi amorẽm noxium

Horrescit, ad caelestia / Iter perëgit arduum.

Carnem domans ieiunio, / Dulcique mentem pabulo

Oratiois nutriens, / Caeli potitur gaudiis.

Rex Christe, virtus fortium, / Qui magna solus efficis,

Huius precatu, quæsumus, / Audi benignus supplices.

補足 ガラシアの詠んだ和歌と辞世について

東西宗教交流学会の講演の時に細川ガラシヤの歌について説明してほしいという質問があったので補遺という形で簡単ではあるが私の解釈を個々で纏めておきたい。いうまでもなくガラシヤの義父は古今伝授を受けた千石時代の代表的な歌人であり、忠興や高山右近の師事した千利休の茶湯には、主人と客人の応答によって成り立つ連歌の相互主体性の美学的伝統が脈々と受け継がれていた。ガラシヤの歌として語り継がれてきたものはそれ細多くはなく、作品の真正性について疑義のあるものもあるが、ここではガラシアの一生を映し出していると思われる代表的な歌をいくつかあげてみたい。

身を隠す野間の吉野の奥ふかく花なき峰に呼子鳥啼く
「野間の吉野と」はガラシアの幽閉された味土野で桜の名所でもあった。八幡山の城に置いてきたわが子の上を思いを馳せた歌として伝承されている。

逢ふとみる情けもつらし暁のつゆのみ深し夢のかよひ

じ

逢ふと見てかさぬる袖の移り香ののこらぬにこそ夢と
知りぬる

忘れむと思ひすててもまどろめば強ひて見えぬる夢の

おもかけ

夢を詠んだこの三首も味土野にあって、およんばく遇う

ことのかなわぬ夫忠興の夢を見たときの歌と解釈できよう。

恋しともいはばおろかになりぬべしこころを見する言

の葉もがな

色ならば何れかいか映つるらん見せばや見ばや思ふ

心を

いわゆる「忍ぶ恋」のうたであるが、「心」を重んずる日本の歌学の伝統を讀者は感じるであろう。

辞世

散りぬべき時知りてこそ世の中は花も花なれ人も人な

「聖グレゴリオの家宗教音楽研究所の会報の外国語版で、私は、細川ガラシアの辞世を次のような四行詩として英訳を試みた。

Knowing the providential time of falling,

In the midst of the world

Flowers become what they are,

The person becomes who she is!

まず「散りぬべき時知りてこそ」という言葉には、飛花落葉の無常世界の一瞬の時にこそ不易なるもの、永遠なるものの姿を写し取る、世阿弥にまで遡る「花の美学」の伝統が、没落のなかにこそ摂理を見出すというキリスト教的な世界観に結びつくであろう。辞世を詠むという日本に固有の文化的伝統とキリスト教の摂理思想を統合することが英訳という作業を通じて試みたものであったが如何であろうか。

① ガラシア はこの劇の「エピソード」で次のように頌えられている。

Magnanimam principem, Virtutis verae imaginem, Lapsi saeculi prodigium. Vide, vide hanc in Gloria, Hanc illi parta dedit Victoria. Vicit minas et catastas, Vicit flagra, vicit hastas, Vicit insanum, vicit furorem, Vicit tyrannum, vicit dolorem, Felici cuncta omnino- Sacro pro Christi nomine.

気高き寛大な王妃、まことの美德の鏡、墮落したこの世の驚異、栄光に包まれた彼女をご覧なさい。彼女には勝利が待ち受けている。脅しと拷問に勝ち、鞭と槍に勝ち、狂気を克服し、残酷な忿怒に勝ち、暴君に勝ち、苦しみを受けながらすべては至福の前兆を伴い、キリストの御名に捧げられた。

② この烈女傳には、細川忠興と夫人の間に交わされたと伝えられる相聞歌が収録されている。

なびくなよわが姫垣の女郎花 男山より風は吹くとも 忠興
 なびくまじわがませ垣の女郎花 男山より風は吹くとも 玉
 この相聞歌がいつよまれたものであるかについては諸説があるが、おそらく、朝鮮に出陣中の忠興が大阪の

細川邸にいる王子に送った歌とみるのが妥当性が高い
ようである。

③ 「死を視ること帰するがごとし」とは、故郷に帰ることく平
然と死に赴くことを云う。

(大戴礼 曾子制言上に拠る)

④ ヘルマン・ホイベルスの「細川ガラシア夫人」資料編、「イ
エズス会士の書簡に見られる細川ガラシア夫人」(春秋社、
1966)のテキストに従う。

⑤ 有馬でかかれた一五八八年二月二〇日付書簡のなかで、ガラ
シアのセスペデスに宛てた書簡が引用されている。

⑥ 前掲のヘルマン・ホイベルス著『細川ガラシア夫人』(春秋社、
一九六六年)資料篇の邦訳に従う

たなか・ゆたか
上智大学名誉教授